

2023年8月6日（日）主日朝礼拝説教

『命を得る～変容～』 井上隆晶牧師
マルコによる福音書8章31～9章8節

今日8月6日は広島「原爆の日」、9日は長崎「原爆の日」です。今年で戦後78年になりますが、多くの方の犠牲によって今日の私たちがあることを思い、戦争で亡くなった犠牲者のために黙祷を献げたいと思います。

①【神に従うか、自分に従うか】

さて、8月6日は教会暦では「変容祭」になります。そこで今日は「変容」のお話をします。私たちがクリスチャンになる前は、人生で選択しなければならない事が起きた時、どちらが自分にとって益になるかという基準で生きてきました。自分中心に考えてきたのです。しかしクリスチャンになってからは、その基準が変わりました。つまり、**神に従うか、自分に従うかになったのです。クリスチャンにとっては、この二つの道しかありません。**エデンの園の中央の二本の木が、二種類の生き方を象徴していたのと同じです。己に従えば神に背くことになり、神に従えば自分を殺さなければなりません。イエス様は「自分は必ず苦しみを受けて殺され、三日目に復活する」と弟子たちに教えた時、ペトロはそれをどうしても受け入れることが出来ず、イエス様を脇へ呼んでいさめました。するとイエス様はペトロに「**サタン、引き下がれ。あなたは神の事を思わず、人間の事を思っている。**」（マルコ8:33）と叱られました。ペトロは判断を誤ったのです。イエス様は弟子たちに「**自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。**」（34節）といわれました。自分の思いを殺して、神に従う道を選びなさいといわれたのです。

②【人は命というものを誤解している】

「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。」（35～37節）

ここを読むと、どうもこの世の人は、命というものを誤解しているように感じます。弟子たちもそうだったのですが、この世で重んじられるもの、地位、財産、豊かさ、長寿を手に入れたら、自分は幸せになれる、自分の命を救えると思いついていました。だから弟子たちは最初「この世」を求めたのです。それは今でも変わりません。人はこの世の資源を求めて、戦争を繰り返します。時代が変わり、人が変わってもすべての人の中に罪、この世を求める思いがある限り戦争は亡くならないでしょう。でも主イエスは全世界を手に入れても「自分の命」は得られ

ないと言われます。命を得る方法はただ一つ、神に従う事であると言われるのです。

●星野富弘さんという方がいます。高校の先生をしている時に、バク転に失敗して、首から下が麻痺してしまい、重度の心身障害者になりますが、聖書を読んで信仰を持ち、口に筆を加えて花の絵と詩を描くようになり、多くの人に勇気と慰めを与えて来られました。彼が次のような詩を書いています。

「いのちが 一番大切だと 思っていたころ 生きるのが 苦しかった
いのちより大切なものが あると知った日 生きているのが 嬉しかった」

星野さんがここで言っている「いのち」というのは、肉体の生命（寿命）のことを言っているのだと思います。この寿命を必死に守ろうとしていた時、生きるのが苦しかったというのです。でも、寿命より大切なものがあることを知った時、嬉しくなったというのです。寿命より大切なものとは「神」だと思います。自分を生かしている、自分より大きな神（大きな愛・大きな命）を知ったのだと思います。この方が命の本体であって、その方との交わりこそ本当に生きる事なのです。いつも言っているように「この世のいのち」は「永遠のいのち（神のいのち）」を獲得するための資本金にしか過ぎません。資本金をいくら大切に守っても意味がないのです。預かったタラントンを土に埋めるようなものです。資本金を用いて、この世のものではなく、永遠のものを集めるのです。時間があるうちに祈り、体が動くうちに善を行うのです。

③【永遠の命の輝きを見せられたイエス様】

「六日の後」(2節) イエス様はペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子だけを連れて高い山に登られました。ヘルモン山かタボル山だと言われています。すると、イエス様の姿が突然変わり、服は真っ白に輝きました。これを「変容」といいます。復活の栄光の体を一瞬の間、見せられたのです。エリヤとモーセが現れて、イエス様と語り合っていました。エリヤは預言者の代表、モーセは律法の代表ですから、この二人は「旧約聖書」を象徴しています。イエス様を真ん中にして、彼らが語りあったのは、エリヤとモーセを立てたのはキリストであり、旧約はキリストを証ししており、キリストによって完成することを教えています。ペトロは恐れて「先生、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、一つはエリヤのためです。」(5節)と言うと、雲が現れて彼らを覆い、「これはわたしの愛する子。これに聞け。」(7節)という神様の声がしました。弟子たちが辺りを見回すと、誰もおらず、イエス様だけがおられました。

「仮小屋」とは、私たちの「この世の体」を意味しています。イエス様は私たちが、仮ではない永遠の体（神の国の体）へと変容するために来られました。この山で、やがて弟子たちがもらえる栄光の体を見せて下さり、これから起こる十字架の試練につまずくことなく、勇気を出すように教えられたのです。これが「六

日の後」すなわち「第七の日」に起こったことには意味があります。第六の日に人間は創造され、第七の日に神と交わって（礼拝して）人間は復活し変容するのです。復活は人間がそのまま持っている能力ではありません。創造されただけの人間は復活・変容できないのです。この変容の物語は、イエス様の生涯の真ん中に置かれています。これは復活は死後に起こることではなく、人生の中で既に始まっていることを教えています。私たちの日常生活の中に復活は隠されています。復活はすでに私たちの中に始まっていますが、その完成は待たなければなりません。神との交わりをやめてしまえば、復活も消滅してしまうのです。

●小林武彦という生物学者が『なぜヒトだけが老いるのか』という本を出されました。本来の生物学的なヒトの寿命は50～60歳くらいではないかと言われていました。なぜかというゴリラやチンパンジーの最大寿命が大体50歳前後であり、チンパンジーとヒトは、遺伝子情報が98.5%が同じであるということ。哺乳動物の一生の心拍数は、ハツカネズミもゾウもほぼ同じで15億～20億です。人間に当てはめて計算すると50歳前後になるということ。また55歳くらいからがんて亡くなる人数が急激に増加するからだといいます。昔から「人生50年」と言われてきたことは嘘ではないという事です。

さらにゴリラとチンパンジーは子供が産めなくなったらすぐに寿命を迎えて死んでしまいます。サケも産卵後に急激に脳が萎縮し「突然死」します。生物には、ほとんど「老後」はありません。老後のある生物は人間だけです。人の寿命が50歳位だとすると、その後30～40年ほどの老後があり、人生の約40%の期間が老後となります。なぜでしょうか？小林武彦さんは答えを出せません。

これは罪と関係しているのではないのでしょうか。昔「命が長いのは、悔い改めるチャンスが与えられているため、命が短いのはこれ以上罪を犯さないため」という言葉を聞いたことがあります。神様は私たちが罪に気づき、回心するのを待って下さっているのだと思います。私の体験では、人間は苦しまなければ回心せず、変わることが出来ないと思います。苦しみがその人を変えたのを何度も見てきました。また死ぬ前に、神様と出会い、回心した人もいました。人生は最後まで分からないという事です。

人生はすべて復活に向かっていきます。それを知っている人と知らない人とでは天と地の差があります。この世が全てではないという希望が出てくるからです。「ただイエスだけが彼らと一緒におられた」という言葉は慰めに満ちています。人と共にいてくださる主に感謝します。このイエス様から離れることなく、夏野菜のように、私たちも良い実を結ばせていただきたいと祈ります。